

博士論文（要約）

**家族関係における老親介護の意味：
母娘関係に注目して**

馬場絢子

■ 第一部 序論

第一部では、まず高齢者を介護する家族がおかれている状況について整理した上で、介護者と要介護者との関係を扱った先行研究をレビューし、親子介護、特に母娘介護の理解・支援において介護以前からの介護者-要介護者関係に焦点を当てるべき理由を述べた。

これまでの介護研究では介護者と要介護者との相互作用や介護以前からの関係性という文脈性が十分に扱われてこなかった。しかし、親子介護には立場の逆転といった介護以前からの相互関係と不可分な側面がある。中でも高い親密性を有する母娘介護においては、介護以前からの距離感を理解し支援を構築する必要がある。そこで本研究では、成人期前期までを中心に展開されてきた母娘研究の知見と介護開始以降を切り取ってきた介護研究の知見とを結びつけ、介護以前からの母娘関係が介護においてどのように表れるのか明らかにすることを目的とした。なお、母親が娘を生み出して以降紡がれてきた母娘関係が介護を経て終結していくプロセスを発達の観点から理解する上で、介護者・要介護者の二者関係のみならず、介護者の子世代との関係性を含めて家族の中で介護を立体的に捉えようとした。

本研究は8つの研究から構成された。その構成を末尾に図示する。

■ 第二部 家族介護における母娘介護の特徴（研究1・2）

第二部では、母娘介護の特徴を理解することを目的に、介護保険給付データおよび施設待機者向けアンケートデータの二次分析を行なった。

まず研究1として首都圏に位置する中核市のデータを分析した。この結果、親子介護の中でも母娘介護が多いこと、母娘介護においては訪問系サービスの利用が少なくショートステイの利用が多いこと、介護を交替して行える人の割合が低いことなどが明らかになった。この結果から、母親を介護する娘は介護から離れることが難しく、レスパイトニーズが高いと考えられた。

研究2では地方部に位置する広域連合のデータを分析した。この結果、親子介護の中でも母娘介護が多いこと、母娘介護において「家族のなかで自分だけが介護をしている」と感じている割合が高いこと、介護者の仕事の有無やゆとりのなさが介護負担と関連していることなどが明らかになった。この結果から、母娘介護の負担を心理学的に扱うことが有用と考えられた。

研究1・2から、共通して母娘介護の多さや母娘介護者の無援状態が示された。居住形態やサービス利用状況の違いから、地理的特性による介護状況の違いが考察された。

■ 第三部 家族関係における娘の介護体験（研究3-5）

第三部では、介護以前からの母娘関係が母娘介護にどのように影響するか、主観的体験をモデル化することを目的に、質的研究を行なった。

研究3では主介護者として母親を介護している、もしくはしていた経験がある娘12名を対象としたインタビューデータを用いて、複線径路等至性アプローチにより介護体験プロセスを記述した(研究3)。プロセスは介護者意識醸成期・介護役割の受け止め期・介護様式の模索期の3期に分かれ、母親の介護が必要になる前から家族のなかで《介護者意識の共有》がなされていたこと、実質的な手伝いの開始と《介護者アイデンティティの確立》は必ずしも一致しないこと、《サービスのフル活用》や《負担感に対処する》ことが在宅継続につながることで、在宅看取り実現のためには《母娘関係の更新》への対応が必要であることなどが示された。

研究4では研究3の結果から母娘関係の変容やその受容に注目し、研究3のデータを含む15名の母娘介護データを用いて、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行なった。この結果、カテゴリ【意味づけ】およびサブカテゴリ<母娘関係の動揺><受け入れがたさ><切り離し><受容>によって[自然な受容][諦め][切り離し][受け入れ葛藤]の4パターンの意味づけプロセスが示された。これらのプロセスは、“母親イメージとの乖離感”“立場の逆転感”“従来の母親を求める”といった介護以前からの母娘関係と関わるプロパティを含め、娘の“割り切り度”“老いや症状として理解”“残存機能への注目”“関わりを楽しむ”“自己の揺らぎ感”“母親の肯定的フィードバック”を加えた9つによって決定づけられた。考察では、母娘関係における自立・分化とプロセスとの関連や、義母介護・父親介護との異同等が検討された。

研究5では研究3の結果からサービス活用や負担感への対処のスタンスを含む認知的介護態度に注目し、研究4同様のデータを用いた質的分析を行なった。その結果、認知的介護態度の構成要素として【介護への主体性】【介護者-要介護者双方の自立性】【要介護者の老いと死への準備性】【周囲との協働性】の4つが見出された。これらはそれぞれの高低によって<能動的><自動操縦>、<手放す><保護する>、<自然に任せる><抵抗する>、<援助体制を作る><抱える>という異なる行動様式として現れ、介護以前からの母娘関係や介護負担との連動がうかがえた。考察では、先行研究との比較や義親介護との異同に関する検討が行われた。

研究3-5により、介護を母娘関係という長期的な時間軸の中で捉えることができた。

■ 第四部 長期的親子関係と介護（研究6・7）

第四部では、介護の意味づけ・受容や認知的介護態度といった介護者の内的な要素に注目し、介護以前からの介護者-要介護者関係との関連を検証することを目的に、量的研究を行なった。

研究6では、第三部で得たインタビューデータをもとに既存の尺度を参照しながら実親介護の受容および介護態度を測定する項目を作成した。Web調査により得られたデータ($n=534$)を用いて因子分析を行い、得られた尺度について信頼性を確認したのち、既存尺度との相関係数から妥当性を確認した。

研究7では、研究6で作成された実親介護受容尺度・実親介護態度尺度を活用し、4つの仮

説モデルを検証した。ここでの仮説は、①介護以前からの親子関係に関する介護者側の認識が、実親介護の受容に影響を与える、②介護以前からの親子関係に関する介護者側の認識が、実親介護態度に影響を与える、③実親介護の受容と介護態度が、介護負担と関連する、④介護負担は介護者の心理的 well-being と関連する、の4つであった。パス解析の結果、仮説①-③は部分的に支持されたが、仮説④はほとんど支持されなかった。なおこの分析は母娘介護の特徴を明らかにするため、母娘介護グループとその他の親子介護グループの二群による多母集団同時分析として行った。これにより母娘介護においては実親介護受容の因子「諦めと願望」と実親介護態度の因子「自動操縦」との関連が高いことなどが示された。

■ 第五部 家族における介護の意味（研究8）

第五部では、介護者とその子どもという今まさに「介護以前からの親子関係」を紡いでいる二者に注目し、三世代の関係性に介護を位置づけることを目的に、質的研究を行なった。

まず予備研究として、第三部で得たインタビューデータのうち子どもを持っていた11名の語りを活用し、子どもとの関係や介護への関与についての認識および子どもへの期待について、KJ法を用いて整理した。この結果子どもについての語りは《三世代の関係》《母親介護と子ども》《自分の介護への子どもの関与の見通し》の3つに大別された。現在の母親介護や将来の自分の介護に関する子どもへの期待は、子どもとの物理的距離や良好な関係に裏打ちされていた。将来の自分の介護については、介護させたくない気持ちと頼れる期待の間で揺れている様子が見えてきた。

これをふまえて研究8では、親が祖父母の介護をしている大学生($n=4$)を対象にインタビューを行い、M-GTAにより分析した。この結果、介護が必要となった祖父母の変化により《介護がもつインパクト》を受け、これまでの日常生活が圧迫されたり、介護を通じて見えた家族の一面に気が付いたり、家族の協力関係や脆弱性が浮き彫りになったりすること（《生活を変える介護》）、祖父母の変化への多様な反応や介護への関わり方が見られること（《孫世代として介護に関わる》）、こうした介護体験により漠然とした介護イメージ具体化し、将来や社会への視線を伴っていく《介護の捉え方の変化》が生じることが描かれた。

予備研究・研究8では、目の前の介護者の親の介護を通じて子どもとの親子関係にもとづく将来の介護者の介護の準備がはじまっていることが示唆された。

■ 第六部 結論

第六部では、本研究で得られた知見をもとに、既存の介護者支援がリーチできなかった長期的な家族関係にも基づく葛藤や困難にアプローチする包括的心理学援助モデルを提示した。本論文の学術的意義としては、介護研究において家族の文脈に目を向ける重要性を示したこと、

家族発達研究において介護というイベントのインパクトを示したことが挙げられた。

本研究には、サンプルの偏りにより外的妥当性が不明瞭であることや回顧によるデータの変質といった限界があった。今後はサンプルの拡充や縦断調査，提案した援助モデルの実践研究などが有用と考えられる。

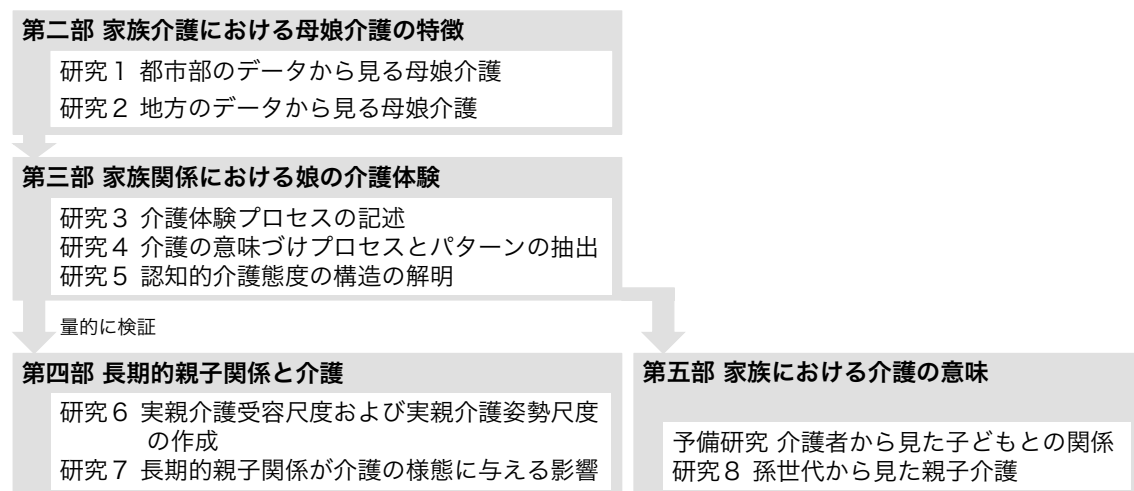


図 研究の構成